

曹操の樂府詩と魏の建国

はじめに

建安文学の主宰者である曹操は、建安詩人の中で異色の存在である。

建安詩人たちの文学史上の功績には、古詩十九首をうけついで文人による五言抒情詩を完成と隆盛に導いたこと、さらに五言詩の題材を大きく広げたことがある。またその功績は、かれらの創作活動が、建安文壇ともいべき集団の、贈答や競作といった社交の場においてなされたことに、多く拠つていられる。なければならぬだろう。しかし、曹操はその主宰者の位置にあつて、贈答詩はおろか、一首の徒詩も残していない。現存する作品二十余首はすべて樂府詩なのである。

もちろん建安詩の文学史上の意義については、文人

道家春代

による樂府制作の道を開いたこともあげなければならない。樂府詩は五言徒詩と並ぶ建安詩の両輪の一方である。この二つのジャンルから建安詩人の作品をみてみると、樂府の作者は主に曹操、曹丕、曹植父子であり、他の建安詩人らによる樂府の数は少なく、王粲、劉楨ら中心的な詩人は主に徒詩を制作している。とはいえ、曹丕も曹植も作つた樂府と徒詩はほぼ同数で、「雜詩」のような五言抒情詩や、贈答詩及び同一題による競作のような社交上の徒詩も残しており、曹操のように極端ではない。この点から、建安文壇の中で曹操は独自の存在に見えるのである。

曹操は自己表出の手段として、なぜ樂府のみを選んだのか、その意図は何であつたかを、作品の内容と、魏国の創建者としての曹操の立場から考えるのが本稿の目的である。

現存する曹操の樂府詩は、「却東西門行」をのぞいて沈約『宋書』樂志（以下宋志と略称）三に「相和」と「清商三調」の「平調」「清調」「瑟調」それに「大曲」に分類されて収録されている。「相和」について宋志三は「相和、漢舊歌也。絲竹更相和、執節者歌」とい、また宋志一には、民間の歌謡史を略述する中に、「凡樂章古詞、今之存者、並漢世街陌謠謳、江南可采蓮、烏生、十五、白頭吟之屬是也」とある。「樂章古詞」とは、宋志三所載の相和及び清商三調中の古詞を指すから、これらの古詞は皆民間の歌謡で、初めは徒歌であつたものが、宮廷の樂歌に取り上げられるに及んで管弦にのせられたと考えられる。曹操の樂府はこの「漢世街陌謠謳」につけられた新たな歌詩である。しかし、常に指摘されるように、その詠う内容は、本辞や樂府題にとらわれない自由なもので、擬古樂府でないという意味で創作詩に近い。しかもそれは民歌風でもなく、表現の面からみても樂府的不是ない。

民衆の悲喜こもごもの素朴な感情を歌う古樂府は、しばしばその感情の由るところを物語仕立てにして語

る。たとえば、孤児の悲惨な生活を語る「孤兒行」、貧窮のために強盜に出かけようとする夫とそれを引き留めようとする妻の間答から成る「東門行」、桑を採む美女羅敷が、言い寄る使君を見事はねつける「陌上桑」、豫章山の白楊が切り出され、洛陽宮の材とされる運命を白楊自身が語る「豫章行」など。これらの作品は、作中人物の独白や問答によつて物語が進行し、時には、物語のクライマックスで主人公が悲痛な情を訴える。聴き手はその言葉に共感し、感情移入するのである。いつてみれば、古樂府は、語り手（作者）の人格が、語られる物語の外に位置し、受け手の共感を得るように語り、受け手もそれを期待するという芸術的要素を持つものなのである。

このような古樂府の表現手法は、建安詩人の手になる樂府詩に受け継がれている。たとえば、陳琳「飲馬長城窟行」はその典型である。長城防衛とは名ばかり、長城建設の工夫として苦役を強いられる兵卒が、役人に抗議するが逆にたしなめられる。犬死を覚悟した兵卒は、故郷で待つ妻に手紙をやり、長城の凄惨な光景を伝え、他家へ嫁ぐことを勧める。前半は兵卒と長城吏とのやりとり、後半は妻との手紙の往復で物語が進行する。曹植の「吁嗟篇」は、魏王朝成立後頻繁に国

替えされ、落ち着く間もなく各地を転々とする自己を
転蓬に投影した、彼の代表作である。根から切り離さ
れて風の吹くままに東西南北、天の果て地の果てへと
翻弄される転蓬の姿と悲嘆を、転蓬自身に克明に語ら
せている。また、「白馬篇」は、功名を立てんという自
己の志を、白馬にまたがった遊侠の若者に託した曹植
前期の快篇であるが、この若者は曹植の理想による造
形で、篇中の彼の勇猛果敢な姿は「語られた」もので
ある。

詩中に語りやセリフが入るといふ表現手法は、建安
詩人の、樂府でない抒情詩にもしばしば使われている。
王粲の「七哀詩」（西京亂無象）はその例である。戦乱
の都長安に見切りをつけて荊州に旅立つ王粲は、一人
の母親が子どもを捨てるのを目撃する。その女は子の
号泣の声に振り返りながらも涙をぬぐいつつ「未だ身
の死ぬ処をしらず、何ぞ能く両つながら相全からん」
とひとりごちつつ去る。

ところが、曹操の樂府詩にはこのような手法で表現
されたものは現存する作品の内には見られない。彼の
樂府詩は、第三者的立場に立つて物語を語るものでは
ない。彼がうたうのは、現実の事件であり、天下統一
の志であり、それを彼自身の事柄として表現している

のである。数篇の游仙詩を例外として、彼の作品に虚
構のはいる余地はない。また、經書及び史子からの引
用の多さからいっても、彼の樂府詩に民歌的要素を読
み取るのは難しいだろう。

内容も表現も発想も樂府的でないとすれば、曹操が
自己表出の方法として樂府詩を選んだのは、それが「
歌」であるからと考えるべきであろう。

彼が音楽を愛好し曉知していたことはいくつかの文
献に見える。

漢世、……桓譚、蔡邕善音樂、馮翊山子道、王九眞、
郭凱等善圍棋、太祖皆與埒能。

（『三國志』武帝紀裴注引『博物志』）

御軍三十餘年、手不捨書、晝則講武策、夜則思
傳、登高必賦、及造新詩、被之管弦、皆成樂章。

（同『魏書』）

今之清商、實由銅雀、魏氏三祖、風流可懷。

（宋志一）

但歌四曲、出自漢世。無弦節、作伎、最先一人倡、

三人和。魏武帝尤好之。 （宋志三）

『魏書』の記述からすれば曹操はもっぱら歌う（もし
くは歌わせる）ために樂府詩を作ったということにな
る。しかしそれは、単に俗謡に新しい歌詩を作って樂

しんだ、というのとは違ふようである。「登高能賦」は周知のように士大夫に要求される教養の一つである。

曹植が「武帝誄」で「既總庶政、兼覽儒林、躬著雅頌、被之瑟琴」というように、曹操の樂府はその子曹植にとつて「街陌謡謳」どころではなく「雅頌」に比定されるもの、すなわち、単なる音楽愛好という父の趣味の産物以上のものと考えられているのである。

では、曹操自身にとつて樂府詩を作るといふことはどんな意味を持つものであつたのか、それを考えるためにまず曹操の作品の内容を確認することにする。

二

曹操の樂府詩の題材は大まかに時事、古事、游仙の三つに分類できる。それぞれの題材によつて、詠時詩、詠古詩、游仙詩と呼ぶことにする。

詠時詩はまた二つに分けられる。一つは鍾惺のいわゆる「漢末實錄、眞詩史」で、大きく天下を材にとる「薤露」と「蒿里行」である。「薤露」は、靈帝の死後、何進の宦官誅滅の謀の失敗が董卓の乱を引き起こし、洛陽の破壊、長安遷都に至つたことを、「蒿里行」は、董卓討伐の義兵が相次いで起こり、一旦は袁紹がその

盟主となつたものの、諸將がおのおの自利を圖つて分裂して争つたため、人民に多大な損害をもたらしたことを悼む。

詠時詩のもう一つは、曹操自身の遠征に材を取つたものである。「苦寒行」は、いつ果てるとも知れない軍旅の苦辛を克明に描写し、「却東西門行」は長年軍行に従う兵士の故郷への思いをいう。「苦寒行」は首句の「北行太行山」から建安十一年（二〇六）正月袁紹の甥高幹を征した時に取材するものと考証されている。「却東西門行」は具体的にいつの遠征かを知る手がかりは記されていない。「安得去四方」の句からすれば、どの遠征というわけではなく、むしろ相次ぐ遠征の絶える間のないことをいうのであろう。

「歩出夏門行」は、四解の「龜雖壽」が詠志として余りにも有名であるが、詩全体としては、建安十二年（二〇七）の袁紹の子熙、尚兄弟が奔つた烏桓討伐と、勝利後の帰還途上に材を取っている。一解「觀滄海」に描写された日月星辰に連なる壮大な渤海の秋の風景は、袁紹殘党をすべて討つて河北を手中に収めた彼の得意と、これから平定すべき天下への意欲を象徵するかのである。二解「冬十月」では、帰還の旅の途中、農商の民生の安定をはかることをいい、三解「土

不同」では、嚴寒の河朔の地と人心が荒廢しているのに心を痛める。終わりの「龜雖壽」では、老いた名馬が千里を走る志をなお抱くがごとく、暮年にさしかかっても烈士の壮心は止まないという。天下統一という彼の仕事は、まだ半ばに來たばかりなのである。

「秋胡行」(晨上散關山)は、最初の六句から、建安二十年の張魯討伐の折りのものと考えられている。遠征の道の困難に行き悩む彼の前に崑崙山の真人と名乗る老人が現れ、その自由に憧れるものの躊躇する間に老人は升天してしまう。取り残された彼は悔恨を振りきり、今の苦しい遠征を齊桓公の西征に重ねあわせる。游仙も題材として取られているが、中心にあるのはやはり嚴しい遠征を成し遂げようという意志であろう。

「善哉行」(自惜身薄祐)は、父曹嵩を失なった悲しみという、曹操には珍しく私人としての情をいうものである。初めから四解までは、怙むべき人を失った孤児の悲しみを嫋嫋と訴え、さらに父を殺した陶謙の瑯邪の地に天罰が下されることを願う。しかし、五解では、獻帝の洛陽帰還を喜ぶべきなのに、楊奉らによつて隔てられ、帝に直接真情を述べるのできない嘆きをいう。六解初二句「我願何時隨、此歎亦難處」は、「我願」つまり陶謙への復仇の願いと、「此歎」すなわち天

子に直接真情を訴えることのできない嘆きとを並列している。天子は臣下にとつて父にあたる。公の父を救うために私の父を失った上に、さらに公の父との接触をも断たれた曹操の感傷がこの詩の主題であろう。すなわち、この詩は、単に私情のみではなく、獻帝の帰還にかかわる一連の時事をも材に取るものと考えられる。

詠古詩もまた二つに分けられる。古代の人物を具体的に取り上げるものと、政治制度や理想の治世を古代に求めるものである。前者には「短歌行」(周西伯昌)「善哉行」(古公亶父)が、後者には「度關山」「對酒」がある。両者とも古事を詠ずることによつて、彼自身の政治的抱負や理想を表明する。この群の詩句は、ほとんどが古籍に基づくもので、彼の引用癖がもつともあらわれている。

「短歌行」(周西伯昌)は、周文王が天下の三分の二を有しながら殷への臣節を全うした徳と、管仲の補佐を得て諸侯を九合した覇者齊桓公が尊王の立場を取りつづけた徳を、いずれも孔子の言葉によつて称え、同じく覇者となった晋文公を称えつつも、僭越な行為があったことを批判する。周文王、齊桓公、晋文公同様、自身が漢に臣節を尽くすつもりであることを表明する

ものであることは明らかである。

「善哉行」(古公亶父)は難解である。言及する古人は、周の王業の基礎を築いた哲王古公亶父、その業を末子季歷の子の文王に伝えるべく、父の望みを汲み取って弟に譲った太伯と仲雍、国を譲り合い、殷への節を守って首陽山で餓死した伯夷叔齊、周宣王とその良輔仲山甫、覇者齊桓公と管仲、齊の三代にわたって徳を折らずに仕えた晏嬰の十人であるが、十人に一貫する主題は捉えにくい。特に宣王と仲山甫以下の解釈は、宣王と桓公が晩年人材の登用を誤って禍をまねいたことを批判し、自己の戒めとするという解釈と、主君を補佐すべき仲山甫、管仲、晏嬰が最後は主君や国を救うことができなかったことを批判するという解釈に分かれている。いずれにしてもこの詩が他の詠古詩と同様、彼の政治的意図を代弁するものであることは間違いない。

「度關山」と「對酒」は曹操の理想の国家像や太平の世を、古籍の記録によって提示する。優れた主君が民を治め、賢臣が官吏となつてそれを支える。官吏の任免は厳正な職務評価により、刑罰は公正。井田法により民生は安定し、五等の封建で、恩沢は隅々に行き渡る。ほとんどの句が『尚書』『詩經』『禮記』『孟子』『

左傳』『史記』などからの引用により構成されている。

「短歌行」(對酒當歌)は、曹操の作品の中で「步出夏門行」の「龜雖壽」と並んでもっともよく知られた傑作である。詩中の「對酒當歌、何以解憂、唯有杜康」や、『詩經』「鹿鳴」をそのまま引いた四句「呦呦鹿鳴、食野之苹、我有嘉賓、鼓瑟吹笙」から、この詩が飲宴の歌であることがわかる。この詩の主旨が、天下平定の事業のための求賢にあることは、今更説明するまでもないだろう。詩中には「鹿鳴」のほかに『詩經』「子衿」の句「青青子衿、悠悠我心」もそのまま用いられ、「人生幾何、譬如朝露」「山不厭高、海不厭深」のような諺語のような句も挟まれているが、詩意を断絶したりすることなく全篇が軽快なテンポですすむ。最後に食事の間も惜しんで人材を求めた周公の古事を引き、彼が周公を志していることを表わす。これを詠古詩と呼ぶには、あまりに古事の比重が軽いが、「古を以て己の志を詠ず」という観点から、ここに置くことにする。

游仙詩には、「秋胡行」二首、「氣出唱」三首、「精列」「陌上桑」が挙げられる。これもまた主題から二つに分けられる。

游仙詩については近年活発な論争が行われている。

が、その論点の一つは彼が神仙を信じていたか否かにある。大方の意見は、曹操はむしろ神仙を否定する立場をとっているというもので、彼の游仙詩は「神仙を借りて詠懐する」ものと解釈されている。⁽¹⁰⁾確かに先にあげた「秋胡行」(晨上)はそれに当たる。また「秋胡行」(願登泰華山)は、初め神人と遠遊し、万歳を得ることを願うが、得道不老と伝えられる伯陽らの存在が確認されないことからそれを否定し、自分が力を尽くす場は天下の平定という現実の仕事以外にはないことを確認する。そして、天に定められたものであるのに年命に限りのあることを思い悩むことの愚かさという「精列」もまた同趣のものであろう。生あるものは必ず終期がある。古来あらゆる聖賢も命が尽きたことを考えれば、崑崙、蓬萊を願ってもだれもそれを得ることとはできない。君子は死の至ることを憂えるのではなく、いたずらに時の過ぎ行くことを嘆くのだ。以上三首において、神仙世界は現実を再認識するために語られている。とはいふものの、「歩出夏門行」の「龜雖壽」にうたわれる、限りある年命の終わりを間近にしている烈士の壮心に比べれば、これら三首の志は力弱げに感じられる。晩年にあつて、天下統一への道のりが未だ遠いことを目の当たりにした弱氣と焦燥を奮い立た

せようとしているかのようなのである。

「氣出唱」三首と「陌上桑」における神仙世界は、この三首と対照的に、限りある生から憧れ出でたものではなく、到達できないものというそれへの疑念は微塵もない。しかし、だからといって神仙を信じていたと断ずることはできない。これらの游仙詩は飲宴の歌であろう。「氣出唱」は神仙たちの宴に託して現実の自分の宴を描写するものであり、「華陰山」篇の末二句「萬歳長、宜子孫」と「遊君山」篇の「坐者長壽遽何央」以下は主客の長寿と子孫の繁栄を言祝ぐ言葉であつて、むしろ作者が信じていたか否かは関係ないだろう。⁽¹¹⁾

以上、曹操の樂府詩を、題材と主題を通して見てみたが、飲宴歌である一部の游仙詩を除いて彼の樂府詩に一貫して見て取れるのは、彼の政治的立場及び意志の反映である。もし樂府詩制作の動機が彼の個人的な歌曲愛好であるなら、もっとほかの題材の詩も作られていてもよかつたのではなからうか。たとえば、「遺令」に愛妾たちの身の振り方や生活費までこまごまと案じ指示したり、⁽¹²⁾また戦乱や疫病で一家の柱を失った窮民らを救済する令をしばしば出した曹操であつてみれば、柔らかな男女の愛情や生活の哀歎を題材とするも

のや、陳琳の「飲馬長城窟行」のような庶民の視点から庶民の生活を同情的に描くような作品が。また、個人的な詠懷や言情のために樂府詩を作ったとするに⁽¹⁾しては、曹操の樂府には私人としての感情が盛り込まれることは極めて少ない。詠古詩はいうに及ばず、父の死を悼む「善哉行」(自惜)においてさえ、その情は公人としての嘆きに結びついている。彼の樂府詩は、常に彼の現実の政治的軍事的状況から、將相の立場から、発せられているのである。

ひとまず詠古詩に限っていえば、それらは公人としての所信表明のようである。「短歌行」(周西)について石其琳氏は、「漢王朝からの受命を直前に控えて、彼は身の潔白さを公に表わそうとして、このような詩を作り、……この自己の意識を後世にまで伝えようとした⁽²⁾」という。これは他の詠古詩にも言えることではないだろうか。「度關山」「對酒」は、君主は節儉し、賢良が輔弼となり、民は満ち足りて礼讓が尊ばれるという太平の世をうたう。現実には、豪族が権力を争い、政治は腐敗し、大地主が土地を兼併し、大量の流民と大地主に⁽³⁾囲われる不自由民が発生する戦乱の世となっている。彼が後漢王朝を立て直そうと力を尽くしているのは、己の権力欲のためではなく、民を哀恤し太平

の世をもたらすという理想のためなのである。この二首はそれを公に表明するために作られたのではないだろうか。周文王、齊桓、晋文に己を擬し、太平の世を提示することは、王朝篡奪の下心をかくすための方便であるかもしれない。であるとすればより一層彼これらの樂府詩が、単に個人的な愛好から作られたものではないことが明らかになる。それは、政治的立場を宣伝するための手段なのあり、その制作は公的な行為なのである。そのためには一人で楽しんでゐるわけにはいかない。楽曲に乗せ、飲宴の場で歌わせ、一族の子弟、臣下たち、彼の忠心を疑う朝臣たち、さらには献帝にも聴かせなくてはならない。求賢を趣旨とする「短歌行」(對酒)にしる、客を大勢招いた宴席で披露しなければ、求賢の目的は達せられない。また歌謡の、世間(外部)への流伝の速さと広がりにも、彼は確信を持っていたのではないだろうか。詠時詩や詠懷の游仙詩もまた同様の政治的意図のもとに作られたと考えられるだろう。

三

建安十二年(二〇六)の烏桓征伐の勝利によって河

北を手中に収めた曹操は、翌十三年（二〇七）六月丞相となり、十七年（二一二）には「贊拜不名、入朝不趨、劍履上殿、如蕭何故事」という、破格の待遇を得る。十八年（二一三）五月、魏公に封ぜられ「軒縣之樂、六佾之舞」を賜り、七月には初めて魏の社稷宗廟を建てた。国を有し民を治めるものにとって礼樂は政刑と並んで欠くべからざるものであり、中でも人倫と宗廟祭祀に関わるものとして礼樂の整備は急務とされるが、すでにその準備は整えられていた。

十三年（二〇八）、荊州に劉表を討った曹操は、赤壁の戦いには敗れたが、劉表の急死後、子の琮の投降を受け、それと同時に杜夔と王粲を得た。この二人が魏初の礼樂整備に大きく貢献したのである。『三國志』の彼らの本伝及び『宋書』にそのことが記されているが、ここでは『宋書』を引くことにする。

自漢末剥亂、舊章乖弛、魏初則王粲衛覬典定衆議。

（禮志一）

漢末大亂、衆樂淪缺、魏武平荊州、獲杜夔、善八音、嘗爲漢雅樂郎、尤悉樂事、於是爲軍謀祭酒、使創定雅樂。時又有鄧靜尹商、善訓雅樂、哥師尹胡能哥宗廟郊祀之曲、舞師馮肅服養曉知先代諸舞、夔悉總領之。遠考經籍、近采故事、魏復先代古樂、

自夔始也。而左延年等、妙善鄭聲、惟夔好古存正焉。

（樂志一）

魏國初建、使王粲改作登哥及安世、巴渝詩。⁽¹⁶⁾（同）
彼らは帰曹直後から、礼樂の復興の為に働いていたが、それは後漢の爲ではなく、近い将来の魏の建国の爲だったのである。

ところで彼らが携わったのは雅樂であり、宗廟郊祀や儀礼の際に用いられるものであった。宮廷の饗宴ではもっぱら俗樂が用いられ、それを担当したのは左延年らであった。『三國志』杜夔傳に載せられている、文帝が杜夔に俗樂師らとともに賓客の中で演奏することを求めたとき難色を示したために文帝の不興を買った、その後文帝は他事に寄せて彼を拘禁し、俗樂師達を獄中の彼のもとにやって習わせようとしたところ、自分が習得しているのは雅であるといつて不満顔であったため、免職させられのち死んだ、というエピソードは、逆に雅樂と俗樂とが文帝の宮廷の樂のなかで役割によって住み分けしていたことを示している。おそらく、魏公魏王曹操の宮廷でも同様であっただろう。宮廷の饗宴で演奏されていた樂は、宋志三に記録されている但歌、相和歌、清商三調歌の類であったろう。曹操の樂府詩はそのために作られた、という岡村繁氏

の指摘には耳を傾けるべきであろう。一群の詠古詩と「氣出唱」三首と「陌上桑」は、魏公曹操の宮廷にふさわしい内容である。

では、他の樂府詩はどうであろうか。

各詠時詩が詠ずる時事を次にならべてみよう。

「薤露」 何進の拙謀が董卓の乱を起こし献帝が長

安へ連れ去られるまで。中平六年（一八九）→初

平元年（一九〇）

「蒿里行」 各地に董卓討伐の義兵が起こり、袁紹を

盟主としたが分裂、袁紹が劉虞を帝位につかせよ

うとし、袁術が淮南で帝号を僭称する。初平元年

→建安二年（一九七）

「善哉行」（自惜） 父曹嵩殺害と献帝の帰還。初平

四年（一九三）→建安元年（一九六）

「苦寒行」 高幹征討。建安十一年（二〇六）

「歩出夏門行」 烏桓征討。建安十二年（二〇七）

「秋胡行」（晨上） 張魯征討。建安二十年（二一三）

「却東西門行」（特定できない）

最初の三首は、それぞれの事件の時または直後に作られたとすると、詩の内容と事実とは微妙なずれがある。

たとえば「薤露」であるが、彼が洛陽において實際

に立ち会ったのは、九句目の「賊臣持國柄」すなわち董卓が少帝を廢して献帝を立て國柄を握ったところまでである。曹操は、董卓に任用されそうになって洛陽を脱出し、家財を散じて義兵を集め挙兵する。各地に義兵が起こったのを聞いて、董卓は献帝を長安に移し、洛陽の宮室を焼いた。朝臣や人民が董卓に強迫されて長安へ「號泣して且つ行く」様子や、董卓による洛陽の破壊の様子は、實際には見ていない。この詩がこの事件をリアルタイムに伝えたものとすれば、ここの描写は伝聞による想像ということになる。しかし最後に「微子の哀傷」を持ち出していることに違和感が残る。彼が洛陽に帰って實際に「彼の洛城郭を瞻」て作ったとすれば、東歸した献帝を迎えた建安元年以後のこととなる。その時洛陽は「宮室燒盡し、街陌荒蕪、百官荊棘を披、丘牆の間に依る」ありさまで、朝臣の中には餓死するものもあった。彼が洛陽の廢虚を自分の目で見て、「微子の哀傷」を実感したとすれば、この時の作となるだろう。しかし、この時献帝は確かにこの洛陽にいたのであり、漢はまだ滅んでいない。本心はどうあれ、漢を救って復興させるといふ義挙を、これから實現させようというおりに、亡國殷の臣微子が亡都を見た時の哀傷に自分の感慨を重ねるとするのは、

うなずけない感が残る。

「蒿里行」が表わすのは、関東各地の義兵が袁紹を盟主として団結したことから、袁術の帝号僭称までのあしかけ八年間という長期間のことであるが、言及されている事件は、初めの会盟と連合軍の足並みがそろわないこと、二袁の漢朝への裏切り、すなわち袁術の帝号僭称と袁紹による劉虞擁立の企図のみである。この間にあつた董卓の殺害、献帝の帰還、曹操の保護の下での許への遷都といった重要事件についてはふれていない。

曹操は、自身これら一連の歴史的事件に積極的、主体的に関わってきた。真つ先に私財をなげうって挙兵したのは彼であるし、形勢を見て「躊躇而雁行」する袁紹らに、速やかに進軍するように促し、軍謀を立てたのも彼である。また彼は、劉虞を帝位に立てようとする袁紹の提案をきっぱりと拒絶し、五年後東還した帝を迎えたのは彼だけであつた。天下を狙おうとしている有力な諸將のなかで、彼は忠義の臣そのもの、あるいは、それを完璧に演じている。それなのに、「漢末の実録」である両首のなかで、これらについては完全に口を閉ざしている。なぜだろうか。

「薤露」と「蒿里行」は、題の取り方、連続した歴史

的事件を題材にしていることから、連作と考えてよいだろう。張玉穀と方東樹が両首を挽歌たるに足るといい、崔豹「古今注」のいう「薤露送王公貴人、蒿里送士大夫庶人」にも適っていると指摘するのは卓見であろう。両首のテーマは、先に挙げた諸事件をいわないうことによって、「漢朝の死」で一貫するのである。発端の責任は漢朝自身にある。「所任誠不良」である。確かに、直接手を下したのは董卓であるが、「蕩覆帝基業、宗廟以燔喪」したのは、そもそも何進らに任せた靈帝に責任がある。率先して漢を救うべき、四世にわたって三公位にあつた名家の子袁紹、袁術はかえつて漢に取って代わろうとしている。「所任誠不良」は、あるいは彼らをも指すのかもしれない。こうして漢の命脈は絶え、その「生民」は白骨を野に晒すことになったのである。

先に述べたように、献帝が帰還した時、洛陽は破壊され尽くしていたが、曹操が帝を許に迎えて、「宗廟社稷制度始めて立」ち、曲がりなりにも漢は息を吹返した。微子が見たのは亡国殷の廢虚であつたが、漢は曹操の力で滅亡を免れつつあつたのである。それなのに、曹操が両首でことさらに「漢朝の死」を哀傷したのは、漢の命脈が尽きたこと、しかもそれは漢朝自身の責任

においてであることを明らかにしたかったからではないだろうか。そしてそのことは、曹氏が漢朝を嗣ぐ大義に大きく関わっている。両首は、曹操が漢の滅亡を確信し、天下を己の任とする決意ができた後、乱の過程をふりかえつての作ではなからうか。それは、官渡の戦いで袁紹を破った後かもしれない。建安七年（二〇二）の「軍譙令」で曹操は「吾起義兵、爲天下除暴亂。舊土人民、死喪略盡、國中終日行、不見所識、使吾悽愴傷懷⁽²¹⁾」という。さらに下つて、曹操は建安十六年（二一一）、馬超を討つために西征する途中、洛陽を通りかかり、十五年ぶりにかつての都を見た。この時曹操も同行していて、「洛陽何寂寞、宮室盡燒焚、垣牆皆頓擗、荊棘上參天、不見舊耆老、但覩新少年、側足無行徑、荒疇不復田⁽²²⁾」と描写している。かつての荒廃は少しも変わっていないかった。あるいはこの時の感慨に基づくものかもしれない。

「善哉行」（自惜）には明らかな作爲が認められる。この詩は先にも述べたように、父を失った嘆き、陶謙への復仇の願いと、献帝に直接心情を訴えるすべのないことをいう。詩中「我願何時隨」というが、実はこの願いは献帝が洛陽に戻った時にはすでに果たされている。武帝紀によれば、初平四年から翌興平元年にかけ

て、曹操は復讐の志を以つて二度にわたり陶謙を伐ち、次々とその城を下し、しかも通過した土地の者を多数虐殺した。その時の様子を『三國志』陶謙傳は、「初平四年、太祖征謙、攻拔十餘城、至彭城大戰。謙兵敗走、死者萬數、泗水爲之不流。……興平元年、復東征、略定瑯邪東海諸縣」といい、復讐は凄まじいものだった。孫盛は「夫伐罪弔民、古之令軌、罪謙之由、而殘其屬部、過矣⁽²³⁾」と非難している。その年のうちに陶謙は病死した。にもかかわらずここに献帝への忠情とともに並べるのは、漢朝救済のために彼が払った犠牲を強調したいがためではなからうか。建安五年（二〇〇）、董承・劉備らによる曹操誅殺の密謀が発覚する。「抱情不得叙」は、あるいはこの事件をいい、董承らの讒言によつて献帝は曹操を誤解して、密詔をだしたのだと弁明しているのかもしれない。

結論を先に言えば、詠時詩は一連の魏の創業の物語なのではないだろうか。「薤露」「蒿里行」は、漢祚は漢自身の責任により尽きたこと、漢が滅ぶのは動かしがたく既定のことであることを、「善哉行」（自惜）は、その漢に忠義をつくすためにはらった犠牲と、忠心を理解しない漢帝に疑われ誅されそうになった危機を、「苦寒行」と「却東西門行」は、漢の命が尽きたことに

よって混乱した天下の平定のための軍旅の厳しさ（それは言うまでもなく「東山詩」に歌われた周公の東征に比定される）を、創業の過程をたどるように歌われたものではないだろうか。そして、烏桓征討の勝利は、最大のライバル袁紹の一族を滅ぼし、中原の大半を手中に収め、漢朝に揺るぎのない地歩を築き、新しい王朝へ向かって大きく一步を踏み出した輝かしい記念すべき勝利である。「歩出夏門行」「龜雖壽」は、この遠征からの帰還後丞相となった彼にふさわしい詠懷であり志の表明であろう。

「秋胡行」（晨上）や、詠懷の游仙詩も同様に読めるだろう。残された時間が少なくなってきた晩年の曹操は、始皇帝や漢武帝が晩年求めた神仙による個人的な寿福の追求ではなく、なお天下のために働くことを確認し表明する。

曹操が魏公となり、受命が日程に上ってきたとき、後世にこの革命が正当であることと、創業者曹操が払った犠牲と受けた辛苦を伝えねばならない。その為には、詠古詩と同じく魏の宮廷で、これらの詩を歌わねばならない。その文脈で読むとき、曹操詩に常にある、個人的な感傷を超えた悲憤慷慨と、天下を己の任とする壮志は、より理解できるのではないだろうか。

もちろんすべての作品が、初めから魏国の宮廷樂歌として作られたとはいいたいわけではない。歌謡愛好の趣味によって折りにふれて作り、私的な宴で曲にのせて歌わせていた旧作を、魏建国に伴う樂整備の必要から、採用したものもあるだろう。中には、宮廷樂歌にふさわしく手を加えられたものもあつたかも知れない。また、即興的遊戲的な樂府で、宮廷樂には不適確で採用されず、散逸してしまった作品もあるだろう。「董卓歌辞」「謡俗歌」などの断篇の存在はそれを推測させる。創業の全物語を樂歌によって語るといふ、明確で全体的な構想があつたわけではないだろうが、「幾人帝を称し、幾人王を称したかわからない」²⁴ような軍閥割拠の乱世を平らげた功績と、強大な軍力と政治力を持ちながら漢に臣従するという、周文・斉桓・晋文に匹敵する徳を、自分の死後速やかに成立するはずの魏朝のために、魏朝の創業者として子孫に伝えようという意図は、必ずあつたであろう。だからこそ、曹操は父の樂府詩を「雅頌」と呼んだのであろう。

建安十八年に魏公となつた後、曹操は着々と篡奪の準備を、もう何も憚る必要がないかのように表立って進める。同年に三女を貴人として入内させる。翌十九年三月には、魏公の位を諸侯王の上に置き、十一月に

は伏后とその一族を殺し、二十年正月、中女を皇后に立てた。二十一年魏王に進み、二十二年天子の輿服旌旗を用いることを許可させ、曹丕を正式に魏の太子とした。二十三年六月に陵墓についての令を出した後、七月、曹丕に留守を守らせ、曹操は最後の遠征に出発した。初めは関中に劉備を討ち、一旦洛陽に戻り、次に荊州の関羽を討ったのだが、二十五年正月洛陽に引き返し、そのまま死んだ。自分の死を予想していたのだらう、この遠征のさなかの二十四年七月、糟糠の妻卞氏を王后に立てた。矢継ぎ早の準備は、おそらく自分の死後の革命が速やかに進むよう、環境をできる限り整えようとしたのであらう。そして、曹丕による受命は予定通り遂行され、宮廷楽においても曹操の遺志のとおり、彼の楽府は魏朝の楽として演奏されることとなった。しかし、これが晋朝においても引き続き演奏されるとは、曹操も予期しなかったに違いない。

四

曹操が民間歌謡である楽府詩の制作に手を染めた理由に、その出自が決して貴いとはいえなかったことと、生来の自由な気質から、伝統文化に束縛されることな

く、功利主義・現実主義を文学の上に發揮したという見方がある。⁽²⁵⁾一方、岡村氏は「中国には元来民間歌謡をはしたないものとして軽視する空気はなかったし」、五言詩「のみならず『歌』さえもまた、後漢の貴族・知識人にとって、それを作ることに抵抗を感じような対象ではなかった」と指摘する。⁽²⁶⁾私も曹操が楽府詩を作るのが、反伝統文学的思想の表われと思えないし、その周囲にも革新的という意識もなかったと思う。また、帝王自らが歌を作り言志言情することも、漢高祖、武帝にその先例を見ることができるとも、彼らの歌は「楚歌」で、当時流行の俗楽であった。胡應麟は

高帝黄鵠歌是月明星稀諸篇之祖、非雅頌體也。然氣概橫放、自不可及。後惟孟德老驥伏櫪四語、奇絕足當。若山不厭高及仲達天地開闢等句、雖規模宏遠、漸有蹊徑可尋。⁽²⁷⁾

といい、漢高祖の「黄鵠歌」を継ぐものとして、曹操の「短歌行」(對酒)、「龜雖壽」をとらえている。また、

唐虞以下、帝王詩歌之美者、堯卿雲、舜南風、穆東夏、項垓下、高大風、武秋風、昭黄鵠、孟德對酒、子桓雜詩、文皇帝京、玄宗晚發、皆非當時臣下所及。⁽²⁸⁾

と、堯以来の「帝王詩歌」の系譜をたどっている。帝王が詩歌を作るのは、むしろ儒教的伝統にも沿ったものといえるのではないだろうか。

曹操が音楽に才能があつたことは、すでに述べたとおりであるが、それは決して俗楽においてのみではなかつた。『三國志』杜夔傳に載せられた次のエピソードは、彼のジャンルに関わらない音楽への本質的な才能と雅楽への理解の深さを十分に語る。

漢鑄鐘工柴玉巧有意志、形器之中、多所造作、亦爲時貴人見知。夔令玉鑄銅鐘、其聲均清濁多不如法、數毀改作。玉甚厭之、謂夔清濁任意、頗拒捍夔。夔、玉更相白於太祖、太祖取所鑄鐘、雜錯更試、然後知夔爲精而玉之妄也、於是罪玉及諸子、皆爲養馬士。

柴玉の鑄造した音階が正しくない鐘と、正しい鐘とを雜ぜて聴き比べをして、正しい音を聞き分けた曹操を、杜夔は信頼したに違いない。桓譚・蔡邕に伍す音楽の才能の持ち主であつたという『博物志』の記述を裏づけるに足る話である。曹操は杜夔のほかに、歌・舞のそれぞれのスペシャリストたちを採用し、杜夔を統率者として古樂の復興に当たさせた。単に任せきりにしたのではなく、恐らく厚く保護し雅楽に理解を示した

に違いない。曹操の下で彼らは存分に力を尽くしたであろう。正式に魏朝が発足した文帝曹丕の代になって、杜夔は太樂令、協律都尉に任じられたが、曹丕は柴玉の方を愛待し、先に引いたような侮辱を彼に与えたのであつた。このような曹丕と比較しても、曹操が単なる俗樂愛好者でないことがわかるであろう。

音楽を好むとともに、理解者であつた曹操は、歌の持つ力もよく認識していただろう。曹操の意図は耳を通じて聴取者に浸透し、さらにそれが口伝えで広く広がることを期待していたのではないだろうか。

かれはまた軍樂Ⅱ鼓吹樂も実践的に使っていた。宋志一に「孫權觀魏武軍、作鼓吹而還」とあり、また、王粲の「從軍行」其一是、曹操軍が張魯征討に勝利して帰還したようすを「歌舞入鄴城」といつている。鼓吹を軍中や凱旋に活用していたことがわかる。もっとも鼓吹を用いたのは曹操だけではなく、孫權や後漢末の群雄達の多くも使っていたことを、増田清秀氏が指摘している。⁽²⁸⁾曹操の場合はおそらく積極的に新曲も作つたであろう。白川静氏は「苦寒行」も鼓吹曲であつた可能性をいうが、⁽²⁹⁾その他にも使われた樂府があるだろう。或いは王粲の「從軍行」も鼓吹の為に作らせたものかもしれない。

おわりに

政治的、軍事的に果敢な革新者であつた曹操は、意外に自己の行動の評判と正当性を気にかける人物であつた。先にも引いた建安十五年十二月己亥令には、漢に最後まで忠節を尽くし、取つて代わる意志のないことを述べ、このことは常に自分の妻妾にも言い聞かせ、自分の死後、彼女たちが他家に嫁いだ時には、他人にこの心を知らせるようにといっている、というほどであつた。それほどまでに自分の評判を気にする曹操にとって、宮廷の饗宴は、歌でそれを宣伝する絶好のチャンスだつたことだろう。王粲は「公讌詩」で「管弦發徽音、曲度清且悲。：願我賢主人、與天享巍巍。克符周公業、奕世不可追」という。この公宴ではどの樂府が演奏されたのだろうか。「周公業」をもちだしているのは、それが「短歌行」（對酒）か「苦寒行」だつたからだろうか。兩歌とも「清且悲」というにふさわしい響きを持つ。

曹操はまた、「御軍三十餘年、手不捨書、晝則講武策、夜則思經傳」という、伝統的教養を求めた努力家で、思想的にはむしろ保守的、伝統主義的だつたのではな

いだろうか。樂府詩に多数引かれた経籍の句はそれ物語る。それが、卑しい家柄出身であつたがゆえに欲した虚栄であるとしても、彼はそれを尊重したのである。礼樂の整備は、それゆえ彼にとって急務であり、またその礼樂は、漢祚を継ぐものとして、まやかしてはない、正しいものでなくてはならなかつた。王粲と杜夔を得たことは、彼にとって大きな喜びであつたに違いない。

注

(1) 遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』によれば、他に断篇が四首ある。「董卓歌辭」「謠俗辭」「有南篇」「飲馬長城窟行」。

(2) 『詩經』「園有桃」毛傳「曲合樂曰歌、徒歌曰謠。」

『漢書』「高帝紀上」顏師古注「謳、齊歌也、謂齊聲而歌、或曰齊地之歌。」

(3) 『古詩歸』卷七。

(4) 何焯『義門讀書記』卷四七、黃節、余冠英等による。以下詩義及び考証については、特に記さな

い限り、黄節の注による。

- (5) 『三國志』卷一武帝紀裴注引韋曜『吳書』によれば、実際には陶謙の部下に殺された。

- (6) 張士驄「論曹操詩歌的創作道路」、『江淮論壇』一九八八年第六期、『复印报刊資料』中国古代、近代文学研究(以下同)一九八九年第四期)

- (7) 朱乾『樂府正義』卷八「賁山甫管仲之不能任賢、平仲之不能討賊。」これに対し黄節は、仲山甫と管仲について同意するものの、晏嬰については否定して、董卓が献帝を立てて曹操を相談役にしようとしたことから逃れて東行する途中、中牟の亭長に疑われて拘束された時、知人のお陰で釈放されたことを、晏嬰が崔杼の乱にあつたことに比しているという。末四句についてはさらに解釈は分れている。

- (8) 楊偉立「曹操的『理想国』——读《度关山》《对酒》」、『历史知识』一九八一年第一期、『复印报刊資料』一九八一年第五期)

- (9) 張宏「一九九四、一九九五年魏晉南北朝文学研究綜述」、『广西社会科学』一九九七年第二期、『复印报刊資料』一九九七年第七期)

- (10) 顧衣は「曹操游仙詩新論」、『山东师范大学報』

一九九三年第三期、『复印报刊資料』一九九三年第十二期)で、「游仙詩は曹操から始まり、…游仙詩は本来神仙を借りて詠懐するものであつて、莊子、屈原以来、中国文学中神仙に言及するものは、大抵精神の超越に重きを置くのであつて、方術羽化登仙を迷信するのではなく、游仙詩もまた言外の旨を持つのを正統とする。…曹操は神仙は信じておらず、方士達の養身の道だけを信じていた」という。また、陳飛之・何若熊「曹操的游仙詩」、『学术學刊』一九八〇年第五期、『复印报刊資料』一九八〇年第十六期)は、曹操の游仙詩の主旨は、求賢にあるという。張士驄「是求仙还是求賢」、『中国人民大学學報』一九八八年第四期、『复印报刊資料』一九八八年第九期)はそれを否定し、曹操は初めは神仙を信じていなかったが、左慈等の実証により信じるようになった、曹操の游仙詩は晩年に作られたが、さらに三期に分けられ、曹操の神仙に対する考への変化がそこに表れている、という。

- (11) 『晉書』卷二二樂志上所載の成公綏「正旦大會行禮歌」に「登崑崙、上層城、乘飛龍、升泰清、冠日月、佩五星、揚虹霓、建彗旌、披慶雲、蔭繁

榮、覽八極、遊天庭」という游仙詩がある。あるいはこれらの游仙詩は正月のような慶事に使われたのかもしれない。

(12) 陸機「弔魏武帝文」。

(13) 「曹操に於ける受命問題と『短歌行』」周西伯昌詩「『中國文學論集』第十六號、九州大學文學會、一九八七年」。

(14) 楊偉立前掲論文。

(15) 『三國志』卷一武帝紀。以下曹操については特にいわない限り、武帝紀による。

(16) 王粲には他に「顯廟」(「太廟頌」)がある。

(17) 『三國志』卷二九方伎傳。

(18) 「建安文壇への視角」(『中國中世文學研究』第五号、一九六六年)。

(19) 『三國志』卷六董卓傳。

(20) 張玉穀『古詩賞析』卷八、方東樹『昭昧詹言』卷二。

(21) 武帝紀裴注所引。

(22) 「送應氏」其一。黃節によればこの時の作という。

(23) 武帝紀裴注所引。

(24) 武帝紀裴注引「魏武故事」所載十二月己亥令。

(25) 植木久行「曹操樂府詩論考」(『目加田誠博士古稀記念中國文學論集』一九七四年)

(26) 岡村前掲論文。

(27) 『詩薈』内篇卷一。

(28) 『詩薈』外篇卷一。

(29) 「樂府の歴史的研究」(創文社、一九七五年)

(30) 『中國の古代文學(二)』(中央公論社、一九七六年)

(31) 石其琳前掲論文。石氏は、この虛榮心のために曹操は「後漢王朝からの受命を目の前にして、結局は一步退却してしまった」という。

(本研究には名古屋女子大学平成十一年度特別研究助成を受けた)